

真生

第十卷 第七號

□同じ佛教でも之を釋尊當時と今日とを比べたら、其の宗義内容に非常の相違のあることを認めないものはない。

□釋尊の宗教を根本佛教とすれば直弟子の宗教は同じ佛教と云い乍ら已に上座部と大衆部との分列がある。前者は釋尊の形式を取り、後者は釋尊の精神を取る、而も其の中に又各々の相違を生じた。

□上座部は又上座部に、大衆部は又大衆部に所謂種々の部派佛教なるものが別れた。けれども大衆部と上座部との大いなる流れまでを兩者の間に混同するものではなかつた。

□此の流れは更に大きく、大衆部の中から新たな主義主張が出づるに至つて、從來の佛教を總べて小乗と云い自らの佛教を大乘と呼ぶものが出た。而もその大乘の中にも更に新たなものが出て前のものを權大乘とし自分のものを實大乘と主張した。

□かくて我が國に現存する佛教だけでも十三宗五十六派を數へる。此の外色々の細かい相違を擧げるならば更に多くの違つた宗派があるかと思ふ。

□乍然何故にかうした色々の宗教が起り、宗派が起るのであるか、私は之を宗祖の生活と時代の關係に見るに、是等の宗教は一として時代民衆の生活要求に應じて起つてゐないものはない。

□何となればいかなる宗教も其の説くところ時代の民衆に眞實の慰安を與えぬでは其の宗教は現はれることができないからである。従つて多くの宗教は悉く時代の産物と云つてもよい。

□従つていかに盛大なりし宗教も其の時代の變化と共に其の民衆の生活が異り、其の考へが變つて來れば今までの宗教は其の時代から遠けられ其の民衆から顧みられないのが常である。

□だから封建當時に盛んだつた多くの既成宗教が今日の社會に其の勢力を有せないのも之亦決して謂れないことではない。(念)

宗教より生活へ

□宗教と云へは普通、神を祚り佛を念する等のことだと思つてゐる人が多いやうであります。従つて多くの場合宗教と云へは必ず何等かの宗教行事が伴はないものではありません。

□然に宗教と云ふ宗教の中の釋尊の原始佛教には獨り此の宗教の儀式と云ふものがありません。殊に釋尊御自身の宗教に至つて然りでありませぬ。

□之は釋尊御自身が天地の大道に合して、身自ら神の生活として此の世に御立ちになつてゐるためであります。従つて釋尊の宗教は今や神を祚るの宗教にあらずして、自ら神と一なるの生活、否自ら神そのものとしての生活でありました。

□だから釋尊の宗教は神を祭るの宗教にあらず、自分自らが神たるの宗教であります。言かへれば今までの宗教に一步を進めて、宗教そのものが生活にまでなつた宗教であります。

□念佛を申すのも、座禪をするのも、加持や祚禱に至るまで佛教の究極は一として此の佛陀の生活を理想としないものではありません。佛陀の生活とは人が神となるの宗教であります。(念)

目次

宗教より生活へ	念
一寸先きは	尅子
道德と生活	土屋觀道
念佛こそ佛教の中王三昧	土屋觀道
念佛と生活	土屋觀道
吾朋便り	

誰でも一寸先きは闇です。どうなるかわからぬ――。

此の息子に死なれたら後はどうなるか知らん。此の主人に先きへ死なれたら、後はどうなるだろう。此職を離れたらどうしたらいいだろうか。薩張りわからぬ。

結婚したら後は、幸福になるだろうか、不幸になるだろうか。學校を出たが先きはどうなるだろう。どうしたらいいだろう。悪くするつもりは無いが、かといふて良くなるとばかりも限らぬ。どうなるかわからぬ。不安と云へば不安、危険と云へば危険であります。

然し人生と調ふものは一つの冒険ではないでせうか。どうなるかわからぬ、そこに面白い處があるのです。株や賭け事が興味を惹くのは、乗るか反るかわからぬ、一か八かを渡るところに興味があるので。結果が全く豫想がつかぬ、危険性が伴ふ、不安性が多い、そこに期待も掛るし、希望も湧くのです。それだから面白い。運動競技が流行したり、これに見てゐる野次までが熱狂するのも、そいふ心理がはたらくからだと思ひます。すれば何も先きがわからぬ事を憚む必要はない、却て面白い。

かといふて人間と云ふものは妙なもので、先きがわからぬからと云ふてわからぬが儘で放つて置けぬわからぬものだから、一層今からわかりたいような氣もします。そしてトヒをしたり、神信心や佛信心をして、色々と救ひを頼むのです。そして未來で往生や金儲けを豫約するのです。こんな馬鹿な事は無いが、そうせずに居れぬ弱い心もあります。而しこれは本當の宗教信仰ではありません。

あの自動車が、闇の晩、曲りくねつた田舎道を平氣で、偉い勢で驅つて行くのは、ヘッドライトを點けてゐるからです。電氣照明を持つてゐるから、それで危険を危険とも思はず、勇敢に突進して行くのです。人生の闇路を走るのでも、あのように光りを手元を持つて居れば、路が曲つて居れば曲つてゐる時、中斷して居れば中斷してゐる時で、臨機應變に突き抜けて行けるのです。

一寸先きは闇のまゝでいゝ、極樂を見んならぬの、佛を拜まんならぬといふのでなく、わからぬが儘の闇道へ、平氣で突き進んで行ける力と眼とがあればいゝ、そして明るい自信のある一日一日を創造して行くことが信仰であると思ひます。(尅子)

道徳と生活

土屋 觀 道

一、善 惡 の 標 準

□道徳と云へば人として守るべきものだと云ふことは誰れとして異存はない。何となれば人として守るべき道徳と云ふからである。乍然人として守るべき道徳とはどんな道であらうかと云ふことは深く私共の考ふるべきことである。

□中には善は爲すべし悪は爲すべからずと云ふ人がある。乍然人として爲すべきものを善と云い。爲すべからざるものを惡と云ふ限り、善は爲すべし、惡は爲すべからずと云ふことは當然なことである。乍然それよりもどんなことが善であり、惡であるかと云ふことは更に私共の一層考へねばならぬことではないかと思ふ。

□中には人には良心と云ふものがある。良心は善を爲すべし、惡を爲すべからずと我等に命ずるものなれば其の良心の命ずるところに従ふべしと云ふ人もある。乍然さうした良心も何が善であり、惡であるかを充分に知らない限り、決して自由に働くものではない。だから本當の善惡が何であるかを知らない限り、さうした良心も役せぬことになる。

□中には善惡の標準を最大多数の最大幸福にありとする人もある。けれども、それにしても最大多数

の最大幸福と云ふ前に、然らば其の幸福とはいかなるものを云ふかと云ふことが明かでなくてはならない。又最大と多数と云ふことも全體を意味するものでない限り、それより漏るゝ一分の人のあることを忘れてはならない。一人でもその選にもれる人のあるとは決して完全な道ではないからである。

□其の他正義と云い、自由と云い、平等と云い、博愛と云ふが如き道徳の徳目として之を惡いと思ふものは無い。乍然、かなるものが本當の正義であり、自由であり、平等であり、博愛であるかと云ふことになれば實際の生活に於ける眞實の批判は可なりに困難なものとなつて来る。

□而も、そればかりでなく、正義とか自由とか平等と云ふ徳目も時代により、人によつて其の内容必ずしも一ならず、又時により人により、其の徳目の内容が變化する場合がある。例へば親の仇を討つが如き昔は之を賞したが今は之を許さぬが如きそれである。

□乍然それにしても、其の時代々々に於て一つの道徳なるものがあり、たの道徳觀念によつて多くの人々が自分の行動を或る點まで左右したことは史實の示すところであり、而も道徳の内容に幾分つゝの變化はあるとするも其の變化には又一面の變化すべき道理がある。

□私はかうしたところの道徳の根本中心なるものを道徳の標準として見出すことはできないかと思ふ。

二、善 惡 の 起 原

□それにしては私共の善惡觀念がどうして起るものか、先づそのことから研究をして見る必要がある。何となれば善惡觀念と道徳觀念とが往々一つにして考へられる場合と區別して考へられる場合とがあるからである。

□前後の場合は自己及び他人の行爲を道徳的立場から之を批判的に見る場合であつて、人として爲す

べきことが爲すべからざるごとく云ふ立場から之を見て善惡を云ふ場合である。

□之に反して後者の方は道德的と云ふより、寧ろ利己的に自分に都合よいものをよいと感じ、都合悪いと感ずるものをあしと思ふやうな場合である。だから此の場合後者が必ずしも前者と一致するものとは限らないものがある。否時としては兩者全く相反する場合もないとは限らない。

□此の場合、道德的な觀念と利己的善惡の觀念は何れが先きに起つたかと云ふことを一個人の上について考へたならば先づ道德的善惡の觀念より、自分自身の都合から、割出した善惡の觀念の方が直接でもあり、早くでもあつたではないかと思へる。

□何となれば人の善惡や自己の善惡を道德的に見ると云ふことは人としても人類としても可なりな生長し、發達した後でなくては起り得ないものであるが、唯單に自分に都合のよしあしから感ずるところの善惡は必ずしもそこまで人智が發達せずとも直に起り得るものであるからである。

□従つて、多くの場合、底き道徳の考へは主として主觀的な自分中心から割出したところの道徳が多いやうである。即ち自分の氣にくわぬ人は惡人に見え、自分に氣に入る人は善人に見える如きがそれである。此の點全く人間以外のものに對する好惡と同じものである。

三、道徳の觀念

□ところが、同じ好き嫌いとも云ふものでも、人の行爲や衣食住のやうなもの、私に對しての好き嫌いが善惡として感ずることはそれを道德的觀念としては見ないのであるが、更にその人の行爲や衣食住が自分の好き嫌いのみで之を左右してよいものであらうかと云ふことを社會的に考へた場合、社會の爲めに害しても差つかへぬと云ふことは考へられぬ場合があらう。

□此のことが即ち好き嫌いや善惡の觀念と其の性質を異にしたものとして私達に現はれてゐるのである。而て私共は之を前者に區別して所謂道德的善惡の觀念と云ふのであるが、道德的善惡の觀念は自己對社會の問題とも考へられるのである。

□乍然かうした道德的觀念は本來私共に先在したものでなく、たゞ社會生活上止むなく他よりよきなくせられるものであるが、それとも本來人として内在せるものか、かうした社會生活の上には現はれて來るかとも云ふやうな論議は暫く哲學的方面に譲るとして、兎に角、私共の社會生活上、かうした觀念が私共に現はれて來たことは事實である。

□そこで、其の道德の觀念が私共に起つて來る更に其の根本は何であらうか、本來道德の觀念は私共の行爲について、是非の判斷を與へるものであるが、さうした判斷の中心は社會を考へに入れずしては起つて來ないものではないか。殊に自己と社會、自己と他人との關係に於て然りである。

□而も其の起原の順序は他律的より自律的に進むやうである。

四、道徳の起原

□若し人間の生活に他からの制裁が無つたならば恐らく人間の行爲は自己の欲するまゝに之を行つたに相違ない。否、若も自分の力が他の力より大なる場合、吾人はそれと争つて自分の欲求を押し通すが、動物的性能ではないかと思ふ。従つて權力ある者には自ら守る道德はないと云ふのが多くの歴史が之を證明する。

□然し人間の生は己に多くの場合、家族や民族の間に生れて來る爲めにそれらの人々との關係上、自分の勝手な生活はできない。従つてそこには自分の生活がそれらの人々によつて制裁せられることになる。而もそれは個人同志の上に共通な制裁もあらうし、又共通でない特殊なものもある。

□一例をあぐれば子が親に對して、弟が兄に對してと云ふ場合、或は個人が團體に對して、或は弱者

が強者に對してと云ふ如き場合がそれである。そこには個人々々の勢力の争いの結果、力弱者が強者から強いられたやうな道徳もあり、個人の生活が團體の生活から強られたものもあり、そこには色々の種類がある。

□けれども其の道徳の起りは自ら守るべきものとして、自己の自由を束縛せらるゝの流にある。若し進んでそれが他人まで之に従はしめやうとする場合には多くの場合原始的には自分の權力と道徳とが混合せられる傾きがある。従つて權力なき多くの道徳はたゞ論のみあつて實行せられない事實が多い。

□だから多くの場合、道徳の徳目は主として階級的に云へは權力者の爲めに都合よき徳目が多くして、下級者に都合のよい道徳と云ふものは殆どない。そしてまた、たまたまそれがあつたとしても、所謂權力者なるものは之を守らない。そしてまた無權力者には之を強ゆるの力がない。

五、道徳の變遷

□それだから、其の道徳を實行せしむる力なるものが或る事情によつて變つて來る場合、其の道徳の徳目内容も亦變つて來る。何となれば從來のやうな道徳の内容や徳目では其の時の支記階級に少しも利益とならぬからである。従つて其の變る道徳内容が當時の權力階級に都合よいものであらねばならぬことは許よりである。

□然は其の權力の變化はさう云ふ風に變るのであるか、而も其の變化に一定の法則が若しあるならば、従つてそれに應ずる道徳の徳目も内容も亦自ら其の變るところを推察することができないかと思ふ。

□アントン・メンガーは此の事を「權力と道徳とは常に相一致する」と云い、「權力關係の變化すると

共に、道徳的判斷も變化する」と云ふことを言つてゐる。此の事がどの點まで正しいかは更に充分の研究を要することではあるが、歴史の事實は非常に相一致するものがあるやうである。

□尙社會的權力關係に於て、彼はその權力の要素を五つに別けて、「一、國家制度及び法律制度。此の中を更に憲法及び行政制度、財産制度、家族制度に分けてゐる。二、教會、三、聯業階級。四、黨派

五、行動者に關する他人の意見、特に輿論である」と云つてゐる。

□ところが此の權力關係なるものが各々相關しなからるゝ所に亦色々の變化があり、矛盾があつて一致しないときがある。此の間に所する私共の生活がいかなる道徳を生むのであるかは更に重要な深き反省を要する。

六、權力の移動

□然に今日までの實際社會に於て、權力の移動はいかなる状態に實現せられたか、原始時代の民族は暫く別として、歐洲各國に於ける社會權力の移動は、多くの場合、少數の手より多數の手に移つて來た。但しその實力が支配階級の手にあつたことはもとよりである。

□そしてまた、制度から云へは家長制度から封建制度となり氣權制度に變つて來た。階級的に云へは昔の下民階級が段々上流階級の力を壓えて自らの政權を奪ふやうになつて來た。多くの場合、父長制度が倒れて封建制度となり、封建制度が倒れて民權制度となり、更に君主制度が立憲君主制又は共和制若は立憲共和制と變化して來たが如きそれである。

□此の意味から云へは我國に於ても皇室と臣民との間こそ萬世一系として寸毫の變化もないけれども、それにしても平安朝時代の公家制度から鎌倉時代、徳川時代にかけての封建制度、明治維新前後に於ける議會制度の如き殆ど歐洲各國と變りなきまでに變つてゐる。

□従つて此の間に於ける道德内容の變遷も、之に應じて變化してゐることは少しく道德史を研究するものの皆知るところであらう。

□然に、權力の支配は従前の權力に代つて後の權力が交ることであるから、それに伴ふ道德的意識内容の變化もやがて舊來の道德内容を認めずして新しき道德内容を生むこととなり、所謂新しき道德が舊き道德に代ることとなる。

七、新舊道德の交替と權力の交替

□然は新舊權力の交替は自らそこに道德新舊の交替を意味するものも云へる。従つて舊き道德が衰退して、新しき道德が主張せらるゝ今日、逆に之を見れば舊き權力が衰えて新しき權力の之に代らんとするものゝあることを忘れてはならない。何となれば道德の内容は常に新しき權力と共に變化するからである。

□乍然此の權力の交替にも亦自ら二つの變化があるのではあるまいか、それは所謂天然自然の力の移動と、今一つは之に反した人爲的暴力のそれとである。前者は所謂個人的意識を越えたる自然民衆の發達とも云ふべく、後者は所謂民衆の生活を無視した一階級の專横とも云ふべきものである。

□昔の王者がいつも自分の爲めの國王でなくして、民の爲めの國王であると云ふことを以つて、明君と云はれ明君としてゐると云ふことは此の點を深く考慮したことから出た言葉かも知れない。

□此の意味に於て、現代に於ける權力の移動と道德内容の變化とは果して那邊にあるか。そこには大なる民衆の欲求と力とがあらゆる方面に於て、從來の力と道德とを排撃して新に起らうとする力と道德とを見るべきである。(一九三二、七、三)

念佛こそ佛教の中の王三昧

土屋觀道

□佛教多しと雖も結局は三昧に入つて之を證見するより外にその道はない。而もその三昧の中、念佛こそは正にその中の中心であり總府である。

□何故に念佛が三昧の中の王であるかと云ふに、念佛三昧とは佛に南無するの法であるからである。佛に南無すると云ふことは其の佛に歸依すること、念佛三昧とは佛に歸依し終ることである。

□而も佛に南無し終るとは佛に南無しきること、佛と不二となり、一體となることである。之を念佛三昧と云ふ。即ち如來に南無することの眞の成就が念佛三昧である。

□然に如來に南無するとは如來に歸命することである。如來を外にして一切の法はない、諸法の中心が如來であり、佛教の生命は如來である、故に如來に南無することはそのまゝが一切の諸法に南無することにもなる。

□だから、如來に南無し終るところ即ち一切の諸法に南無することである。念佛三昧の成就の外に諸法の三昧の成就もない。

□此の外に諸法の中の二三昧は念佛三昧の一部にすぎぬ

とも云へる。佛は諸法の中の中心であり總府であるが、諸法必ずしも佛の中心であり總府とは言へないものもあるからである。一切の生命たる如來に歸命し、合掌し、一切を如來に南無し終るところ、念佛に勝るものはない。

□而も多くの三昧は自力の三昧であつて、必ずしも如來大悲の本願三昧ではない。従つてそこには如來の大悲によるの心かない。之に反して念佛の一行は自己の無力を痛感して、其の感を以つて直に如來の本願力に乗ずるのだから、それだけ他力の三昧である。

□此の點から云へば念佛は諸の三昧に比して、全く最勝最易の法門なりと云つてよい。最勝の法とは法力無遍にして一切を包括し、いかなる衆生も悉く救済してもらさぬと云ふ點である。最易の法とはいかなる無力の人と雖も、如來の御力によつて、悉く攝取せらるゝと云ふ點である。所謂自力の法でなく全く他力の法である。

(一九三〇、一二、三二)

教行の二門

□念佛に關する一切の教説は一に之月を指す一つの指に過ぎない。従つて説教が決して月でないことはもとよりである。だからいかに其の教説を聞いて之を知つても、その實體の月を見ない限り、それは本當の教説を聞いたものとは云へない。

□此の意味に於て、月を指さして頂く指としての經典はもとより之を導として敬すべきではあるが、それだからと云つてその月そのものを見ることを忘れてはならない。

□従つて本當の月を見るには經典の教へによるべきはもとよりであるが、月を見ると云ふことを忘れてならない。而て其の月を見るの方法が即ち念佛である。前者は教であり、後者は行である、念佛に教行の二門と云ふのはかうしたところの分けかたにすぎない。

他力の行

□行に自力の行と他力の行とがある。自力の行とは如來の本願によらず、自己の力の修行力によつて解脱を得やうとするにある。之に反して他力の行とは如來の願力に乗して、如來の御救いによつて淨土に生れ、をのづから煩惱を斷して解脱を得、成佛をするのである。

□念佛についても、若し稱ふる念佛を以つて此の二つに

別けるならばやつぱり此の二種の念佛がありうるのである。その一つは自力の念佛であり、他の一つは他力の念佛である。

□自力の念佛とは自分の申す力で往生し解脱しやうとするの念佛で、他力の念佛とは之に反して如來の御濟いによつて往生し、解脱し、成佛しやうとして御佛の救いを仰ぐ念佛である。

□前者は自分の行を力とし先きとするの念佛であり、後者は如來の救ひを先きとし、力を先きとするの念佛である。更に云いかへれば前者は自力を先きとし、後者は他力を先きとする、そこに自力と他力との違いが生じて来る。

□自力の念佛には本願を信じ之によらうとするの信仰がない。之に反して他力の念佛には本願を信じて之によらうとするの願いがある。同じ願行の念佛としても、そこに自力と他力の全く相反した違いがある。

□だから、前者は自分申した力によつて往生し解脱しやうとするに對し、後者は如來の御力によつて往生し解脱し成佛しやうとして御佛にすがの念佛となる。

□外見からでは等しく稱名し、念佛するやに見えりけれども、その實、その人の心の持ち方は全く相反した心相の上にある。だから此の點は念佛者の最も注意すべきと

ころである。而て、淨土宗の念佛が後者であることはもとよりである。

□従つて他力の信に任せぬ念佛は自力の念佛であつて、他力本願の念佛ではない。かと云つて、たゞ念佛も申さずして、如來の救いのみ信じてゐるが如きは行のない念佛として當本でないことはもとよりである。

願行具足の念佛

□信と云ふのに三信がある。一には仰信、二には解信、三には證信である。

□この三信の中、仰信と解信とは經典の文言によつて、之を知り、之を信することではあるが、まだ本當の悟りとは云へない。それは未だ本當の體驗にまで到つてゐないからである。

□之に反して證信は正しく其の信仰の實體に接觸して、眞實の境地に到達した信である。乍然此の信は行を離れ

たる信ではなく、たゞ行の上のみ顯はれて來る本當の信である。

□その行とは即ち念佛の行である。念佛の行とは即ち如來の本願を信じて、その本願に乗して、彼の國に往生したいと思つて、如來の大悲におすがりをする稱名の念佛を云ふ。その念佛の中に顯はれて來る信仰の體驗が即ち稱名念佛の證信の世界である。

□之を心の内面から云へば如來の大悲を仰ぐ如來への願いであり、歸命であり、合掌であり、助け玉への念佛である。

□別な言葉を以つて之を云へば南無の一心と云つてもよい。この一心の外に本當の念佛はない、一心即念佛である。念佛即一心である。歸命即南無阿彌陀佛である。

□一念、多念、常念と云ふ争いもあるがこれはたゞ、念佛に對する見方の相違いにすぎない。

(一九三〇、二二、二二)

念佛と生活

士屋觀道

一、念佛は申すに依るに限る。

□丁度先達ての夜の集りの時でした。一人の青年が「先

生念佛と云ふものはたゞ申しさへすればよいのでせうか私にはどうもそれだけでは申す氣になれません。實は已に二三回も此の集りに集まらして頂きますが、どうも念

佛申す理由が判りません。」と言はれるのです。

□「いや、あなたの御疑いも無理ないことです。一度や二度では念佛のわけが判らうはずありません。それに此の程中は念佛の話と云ふよりも、念佛する人の此の世に生きて行く道をのみ話してゐるのですからね。」

□「私にはあなたの御話の方がよく判るのですがそれが余と念佛とがどうなつてゐるか判らないのです。念佛する人の姿を見てゐると非常に熱心に一心をこめて申してゐられるのを見ると何とも云へぬ尊い姿にも見えますが、また一方でうわのそらでやつてゐる人の姿を見まするさうした人の念佛の姿がいや氣のさすやうにさへ思へるのです。

□「それに私自身としては念佛のわけが判らないものですが、何の爲めに念佛するのか、又どんな心もちで念佛するのか、たゞ口で南無阿彌陀佛を云へと云つてもそれも亦できぬのです。現に暫くはやつて見てもそれでは一心になることもできず、それからそれへと色々の思いが起るものですから、こんなことでよいのかと言ふ疑問も起つて仕やうがなのですと言はれるのでした。

□すると、一人の人がそれを側から聞いてゐられたがいや實はさうした疑問の起るのはあなたばかりではありませぬ。私の同志にも數多くあるのです、昔の人たちは餘

程正直な人ばかりだつたと見えて、たゞ念佛しなへすればよいと教へられてすなをに念佛したやうですが今ときの私達にはそれができません。

□「何の爲めに念佛するのか同じことのみくりかへしてゐるのが何となく馬鹿らしくて時間が惜い氣もします。どうかさう云ふことの無いやうに時々御話をして欲しいものです。」と願はれる。靜に思へば之も亦尤なことでありませぬ。

□念佛とは稱名のことと佛の御名を稱へるとです。文字で書けば佛を念ずるとかいてあるが、此の念は昔は心に思い浮ぶると云ふ意味に使つたのが多くであり、またそれが普通であつたのですが淨土教殊に法然上人の淨土宗では念を稱の義に見るやうになつて、念佛と云ふことを稱佛、即ち佛の御名を稱すると云ふことに見るやうになつたのである。

□佛の御名とは阿彌陀様の御名であります、同じ御名を稱すると申しましたが、何とも思はれたゞ佛の御名を稱へるのではないのであります。たとへば人の名を稱へると云ふ場合、何のわけもなくて人の名を呼ぶこととはありますまい。稱すると云ふことは呼ぶと云ふ意味にとつて頂く方がよく判ります。つまりと云ふところ念佛とは佛の御名を稱すること、それはやがて佛の名を呼ぶこと

です。

□佛の名を呼ぶと云ふことはたゞ單に呼ぶことではありませぬ、やつぱり人の名を呼ぶにも呼ぶ人に用があるからでせう。それと同じく佛の御名を呼ぶと云ふことはその御佛にこちらの方が用があるからです。而も人の名を呼ぶにも色々あつて、先づその人の名を呼んでからその用を告げる呼び方もありますが、何かあふないやうなときはその助けを求むる爲めに「御父さーん」とか「おかあさーん」とか遠く呼びかけることがあります。佛の御名を呼ぶと云ふことは先づそんな意味があります。

□それに南無と云ふ字が歸命と云ふことで、日本語で云へば助け玉へと云ふ意味なのです。どうぞお助へ下さい、阿彌陀佛と云ふ意味が南無阿彌陀佛と云ふことなのです。よく、南無觀世音菩薩とか南無地藏尊とか南無大師遍照金剛とか云ふことを聞くでせう。それはどうぞ太郎さんとかどうぞ次郎さんとか言ふのと同じ意味です。たゞ異なるところはその救いを求むる相手が念佛の時阿彌陀佛であると云ふことです。

□だから念佛は申しさへすればよいと云ふことは即ち念佛はたゞ御佛に南無阿彌陀佛と其の佛の御名を稱へて御救いを求めさへすればよいと云ふことです。それなれば別に念佛が無味乾燥なものでもなくて、全く自分を御救

い下さる此の上もない尊き御佛に一生懸命におすがりすることのできる念佛ともなるでせう。

□世の人が念佛に一生懸命になれぬと云ふのは要する此の御佛におすがりすることをせないからです。

二、どうすればすがるか。

□甲「なるほど念佛と云ふことがそれでよほど判つきりして來ました。然し私共にはそれにすがらうにも、其のすがる佛が信ぜられないのです、阿彌陀様と云ふ御方は果して此の世に在られるでせうか、或る人は此の世ではない彼の世だと申す人もありますが、そのあの世と云ふこともそれがどこか判らぬのです。

□「或る人はあの世と云ふことを死後の世界と云ふ人もありますが、此の世以外に別に死後の世界と云ふものがあるでせうか、それに死後の世界ならば私共は今からかうしてそれを願ふ必要もなく、又それほど死後の往生とかを私共が今から願はねばならぬとすれば現在の此の世の生活をどうしませう。」

□その御尋ねも尤もですが、それが昔の人の多くが誤つて考へてゐた、念佛に對する誤解だつたのです。昔も今も本當の念佛者にはさうした誤解はないのですが世に往々にして淨土を未來において此の土以外に死後にのみあ

ると思つたのでした。極樂とは佛のゐますところを言ふのでありますが、佛のゐますところは一切の苦惱のないところ樂しみの極なるが故に極樂と云ふのです。又佛のゐますところは一切の束縛から解脱せられたところですから、或は解脱の境地とも云ふのです。汚れなきところの故に淨土と云い、煩悩のないところだから涅槃の境とも云ふのです。

□あの世と云ふことは煩悩の境地にゐる私共の心境から煩悩なき佛の心境をさしたに外ならぬのです。だから私共が迷妄の境地を脱しさへすればそこが淨土であり、涅槃であり、佛地であるのであつて、別にあちこちと云つて、物質的に捕はれた客觀の場所を云ふのではありません。今佛の境地は全く煩悩なき境地にゐられるからその境地を私共から彼の世と云い極樂と云つて、客觀的に佛の世界を見てゐるのです。

□だから私共が救はれたいとか、淨土に往生したいと云ふことはさうした佛と等しい境地に私共も達したいと云ふのと同じであります。たゞいさゝか違ふのはさう云ふ境地は私共のやうな凡夫の生活には仲々に現はれさうもありません。然に佛の境涯は常恒にさうした境地にましますこと故に、自分も往きたいと願ふのが念佛者の願いなのであります。

□だから佛に救けて頂きたいと云ふ心はさうした佛のゐませる所の境地へ自分も往かせて貰いたいと云ふ願いが如來様に救いを求むる念佛になつて行くのであります。従つて念佛者の心には常に此の淨土に往きたいと云ふ願いがなくはなりません。

□尙一つの疑問はそんな佛が在りますかと云ふ點であります。普通の人にその疑いも亦止むないことですが、私共の本心の願いをつきつめて行きますと、結局は諸佛の成道と云ふところまで行きます。諸佛の成道とは一切の人類が生き涯ある人となりたい、價値ある生活がしたいと云ふことを突きつめて行けば結局はお釋迦様のやうな佛の境涯になりたいと云ふことになるのです。

□お釋尊の境地とは即ち佛の境地、人としての最勝覺、此の上も無い悟りの境地、所謂無上覺者の生活と云ふことになりませんが、それこそ凡夫の思いも及ばぬ絶對の境地であります。消極的に云へば永劫に死のない世界、苦しみのない天地、清淨涅槃の世界とも云ふべきでせう。一切の惱みなきところ。樂しみの極りなきところであります。

□さうしたところ、又さうした境地それが佛の生活であり、佛の境地だと聞きますればそれが無いとは思へないほどに私共の心が段々とそれが判つて来るのであります。

す。さうして阿彌陀様の世界とはさう云ふ佛の世界のうちで一番勝れた世界、殊に私共のやうな愚夫愚婦も等しく救はれて往くことのできる世界が阿彌陀様の世界だと云ふことが判つきりと信ぜられて来るのであります。

□阿彌陀様とは無量壽、無量光佛のと云ふことであります。智慧と慈悲との最高人格を現はし給ふ御佛を言ふのであります。此の御佛は自ら一切の衆生を救ひ給ふために佛となられた佛であると言はれるのでありますが、何故にかうした願いを此の佛が持ち玉ふかと云ふことも段々佛教を研究するにつれて判つて来るのであります。こゝで判ると云ふことは信ぜられると云ふことと御承知を願つてもよいのです。

□天地に滿てる大ミオヤとも申してよいのです。而もその御姿は私共では拜むことはできないが、一心念佛することによつてそれも亦できるのであります。否さうでなくてさへ、或る程度に佛の御教へが判つてくると、現に此の天地の中に如來の御力が、パイに充ち滿つてゐるのを感じるやうになるのであります。私共が今日それを感じることのできぬのは恰も盲者が大空の明月を見ることのできぬやうなものだと云はれてゐます。又親不孝な子供が親の慈愛が判らないやうなものでありませう。親の慈愛がないのではありません、たゞ／＼私共の智見が

未だ開かずして、それを知ることができないだけです。

三、さうして慈光を見るのです

□乙「それをどうしたら仰けるのでせう。」それが即ち念佛なのです。例へ佛を拜ますとも、佛ましますと信じて一心に念佛すればよいのです。即ち念佛とは前にも申しましたやうにさう云ふ結構な境地、即ちさう云ふ佛の淨土に自分も往きたいと云ふ願いで一心にその御佛におすがりをすればよいのですおすがりすると云ふ方法はたゞ／＼南無阿彌陀佛と御佛の御名を稱へておすがりすればよいのです。御佛よ助け給へと云ふ心であります。

□「さうするとどうなりませう。」

「その結果が即ち救はれです。否現にさうなれるところに已に今迄にない、念佛の事實が現はれて居ります。言へば念佛してゐるところに、已に佛を念じてゐると云ふ一つの前は變つた生活が開いて居ります。

□而もその佛を念じてゐると云ふ事實の中には我も亦佛のやうな境地になりたいと云ふ氣もちや、佛のやうな生活にならうとする努力や、喜びが充ち滿つて来るのでありますからあさましき自分の生活もいつしかかうした望みと喜びの生活に轉化して来るのであります。之を如來

の靈化と申します。昔の言葉で云へば如來の光明の中に
提取せらるゝの生活であります。これを光明生活とも
申してよいのであります。

□之は私なども始めには全く判らぬことであり、又全く
信ぜられぬことでしたが、段々と信仰の事實を承り、念
佛の實行にとりかゝつて、遂に此の生活の事實を體驗す
るに至つたのであります。いかなる悩みも悲しみも此の
念佛の中に消けぬと云ふものはありません。いかに懶け
た心もそこにはかけをひそめます。あさましき煩悶も尊
き光りと變ずるのであります。

□此の意味に於て人類の向上には念佛に勝るものは何物
もありません。

四、さうした後は

□「なるほど餘程判るやうになりました。今一つそれが
ら私共はどうなるでせう。」
「言ふまでもなく、永生の人となるのです、永遠の生命
と限りなき向上の中に、如來を中心として天地の使命を
果すのです神の如く佛の如く、我も亦自由の生活に入る
のです。いつかはまた、神の生活、佛の生活として自ら
生るの時代もまゐります。」
□「それはまた、恰も月のやうな生活です。闇黒の生活
から段々と向上し發展して、智も情も意思の働も天地
の眞善美に融合して、自他不二の生活に此の身をさしけ
て惜まない猷身の大業に入るので。新月進みて満月に
至るが如く、一切の生活が眞實の光に輝く生活となるの
であります。」
(一九三二、七、六)

吾朋便り

□六月はごにも出ないで勉學の豫定で
したが、五月に焼津と静岡との集りを延
ばしてゐたのでそれを果す爲めに出かけ
たのでした。又神奈川県下の浦賀の集り
にも一年ばかり。御無沙汰してゐたので
之また約束をはたしたので。その序に

藤枝町(静岡縣)の正定寺からの頼みでそ
こにも今度集りをする。こゝになりまし
た。百名許りの集りで可なりに氣勢をあ
げました。

□名古屋の方も二十日二十一日と藤枝ま
で行つたので序にすまし、名古屋まで
來たのを幸い大垣に桑原様の病床を訪ね
ました。渡部氏御夫婦と榎本様、谷口様

と醫學士の熊澤様と崇徳寺様の大勢まで
した。可なりと重態と聞きましたが意識
は非常に明瞭でした。私の來たのを非常
に喜んで頂きました。私の方も限りない
なつかしさでした。

□二十二日は佐屋の黒宮様を訪れ久々で
ゆつくりと休ませて頂き、廿三日は桑名
の五井病院の集りです。夜行で歸京、二

十四日の朝には東京の人となり。其の後引つゞき在京ですがあまりに急し
い爲めか全く何をしたか忘れた位です。

□二十四日は夕方から比日谷の公會堂に
現代宗教批判講演會を聴きに行きまし
た。宇野圓空氏、太田正孝氏、永井柳太
郎氏の宗教方面に現代思潮に關する講演
でした。此の中で一人として既成教團や

既成宗教を賞むる人はありません。近頃の既成教團は各方面から攻め
られるものはない有様です。宇野氏の御
話はマルクス反宗教運動は既成宗教のみ
に對してであつて。本當の宗教に對して
は少しも痛やうを感じない云ふ點でし
た。太田氏の御話は物質生活の苦惱と懸
して、現在の社會はさうして、生きるか

に皆が悩んでゐる。宗教問題を云ふまへ
にさうして養ふかの問題だけで全く困り
抜いてゐる、吾人の今日は先づ此の問題
から解決して行かねばならぬ云ふこと
でした。之は可なり宗教があまりに空理
空論や、觀念論になり、實際生活に遠く
はないか云ふことを一面語つてゐるの
です。

□水井氏のお話は宗教なき労働と労働な
き宗教と云ふ題でした。辯は甘いがあま
りに大家になりすぎて私の心を引きませ
んでした。それにしても宗教なき労働者
のマルキストを難し、労働なき宗教の既
成教團をのびつた一面は一般の人々に
は受けたことと思ひます。

□二十七は本所の總壽院での道友の集り
でした。晝から夜にかけての集りです。
二十名許りの集りです。江原小彌太氏も
見えて頂きました。此頃出版になつた出
家と良寛の著者です。良寛を書いた要點
を話されました。私は近頃江原氏が好き
になりました。

□去る四日は學寮での集りでした。晝間
の大夕立で大へんな雨でしたが夕方にな
つてすつかり晴れました。集る者は二十
名許り前日に比して半分でした。私は佛
を信する者の如何に生くべきか云ふ
點を述べて見たのです。私の昨今は佛に
合掌すると云ふことよりも佛を合掌した
ものが此の土に生きて生くべき點を自ら
に行かうとしてゐます。

□此の點について從來の既成宗教はあま

りにも釋尊の生活と離れてゐますし、今
日の資本主義や社會主義はあまりにも經
濟本位です。民衆の爲めから云へば今少
しく經濟的に民衆の生活を安定すべく資
本家と闘はねばなりません。宗教を否
定するマルキストは到底提擧はできざ
うであります。

□先月の十三日でしたが大正大學に今東
光氏と脊尾氏の佛青運動の講演を聞きま
した其の熱心な主張と態度には非常に感
心しました。特に脊尾氏が釋尊を中心と
して既成宗教を否定し、資本主義制度の
革新を中心として赤貧の中に單身奮闘を
つゞけられてゐるところを全く尊い生活だ
と感じました。今氏の運動はまた私には
その態度がハッキリしませんでした。

□それにしても各地にマルキストの多く
なつて來たとや、無産者達の運動の盛ん
になつて來たことは非常に心膽を寒から
しむるものがあります。一面には資本主
義の横暴は到るところに失業者や就職難
の悲鳴がきこえ、一面には之に對抗すべ
く全力を盡すマルキストの進行は仲々に
あなざり難いものがあるかと思ひます。

□此の中間にはさまれた所謂中間階級は
どうなりませう。佛教の立場から言へば
四民平等であり、全一の生活であるべき
はもとよりであります。今では此の中
産階級の方が一番困り抜いて来たやうに
思われます。此の際大いに考へねばなら
ない秋となりました。

□八月は三日から二十日間許り南部支那
視察團に加つて彼の地を一巡して來たい
と思つてゐます。若し幸にして彼地に行
き無事で歸つて來ましたら、可なりに入
考になることも多いかと樂しんで居りま
す。同志の方は御一緒に御出になりませ
んか。七月二十日までに郵船會社に申込
めばよいのです。(七、五)

桑原省三氏を悼む

病床の氏は七月八日遂に他界せらる
哀悼に堪えず詳報後便。眞生社

◎唐澤別時三昧會案内

一、時 七月二十三日ヨリ七日間

一、所 信州唐澤阿彌陀寺

一、講師 土屋 觀道氏

注意

成べく二十二日登山、三十日下山のこと。
二十二日午後五時までに信州上諏訪驛前旅館に集り、一同そこか
ら登山します。
手荷物等入夫の人に頼みます。

誌本定價

一部 金 十 錢 郵税共
半年 金 六十 錢 同
一ヶ年 金 一 圓 同

注文の注意

◎講讀希望者は代金を添へて
御申込下さい。
◎誌代は總て前金御拂込の事
◎送金は振替によるのが便利
です。

昭和六年七月十日印刷納本
昭和六年七月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋 觀道

東京市外濠谷町中通二ノ四二

印刷人 副島 愼夫

東京市外濠谷町中通二ノ四二

印刷所 丹丘舎印刷所

電話青山七五番

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番

(大正十四年八月十三日) 昭和六年七月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第十卷第七號

(大正十四年八月十三日) 昭和六年七月十二日發行

(大正十四年八月十三日) 昭和六年九月十二日發行

(大正十四年八月十三日) 昭和六年九月十二日發行